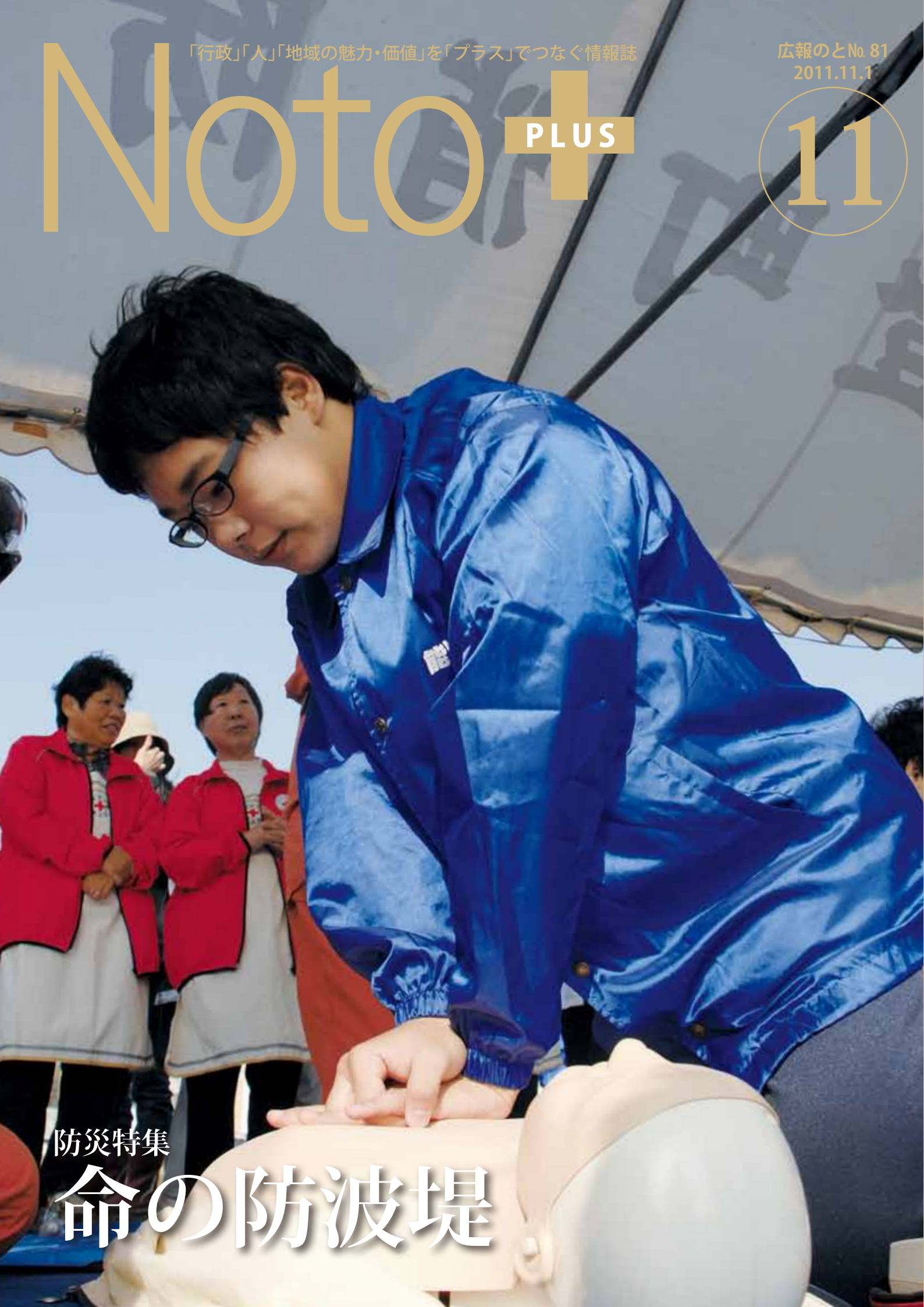


防災特集

命の防波堤



第11回 お弁当 写真・文 中乃波木



のと
ふうど

のはぎが撮る母、
となみさんの料理と家族のおはなし



お弁当の材料

お米もしくはパン

野菜

お肉またはお魚

昨晚のおかずの残り



お弁当という、思い出すのは遠足、運動会、そして学生時代です。私は能登に来る前も、来てからも、給食のある小中学校が続きました。その後お弁当となった高校時代には、親元を離れて金沢で暮らしたため、母・十七波さんのお弁当を、限られた時にしか味わうことがありませんでした。

写真は、十七波さんが父・登史紀さんに作っていたお弁当です。名付けるとすれば、すき焼き丼風弁当といった様子です。

お弁当というのは、作ってみて分かるのですが、美味しく食べてもらえるようにするには、案外工夫が必要です。温かいまま食べる料理と違って、風味や歯ごたえが変わってしまうし、野菜から水分が出てきてしまったり、冷めたおかずは味も薄く感じてしまいます。できたてを食べてもらえない運命にあるのがお弁当。作っても美味しかったのかどうか、「美味しかったよ」が聞けるまでは確信もてない、なんとも読めない料理なのです。

それでも、お弁当でしか出せない味わい、というのも確かにあるものです。ぎゅっと詰まったおかずの色合いや、いつもなら隣り合わせることもない一品同士が、びったり寄り添っているお弁当箱。それを上から眺め、少しずつ中身を空にしていくのは、食卓ではできない味わい方です。タコウィンナーや卵焼きも、いつもの食卓には並ばない、お弁当の常連です。

そして、お弁当に必ずつくっているのは、いつもとは違う風景です。山だったり海だったり、会社だったり畑だったり、家の中ではないどこかで食べるごはんがお弁当。旅するごはんです。どこで、どんな景色を見ながら食べようと、誰と食べようと、どんな順番で食べようと、残そうとも勝手なお弁当というのは、箱に所狭しと入っているながら、見た目によらずとても開放的なごはんなのです。



中乃波木（なかのはぎ）
昭和54年、東京生まれ。13歳の時に母親と共に旧柳田村へ越し。中学の二年半を過ごす。その時の感動が忘れられず、東京造形大学写真学科へ入学後から能登の写真撮影を始め。卒業後は広告制作会社の写真部を経て独立。能登を撮りだして10年目の平成19年12月に初の写真集「Noto」を出版（FOIL刊）。現在は能登で暮らしたころのエッセー「大波小波」を季刊誌「能登」で掲載するなど活動の幅を広げている。母、十七波（となみ）さんは陶芸家として能登町柳田で陶房 眠魂（とうぼうみんと）を構え、19年目となる。